

国王陛下、私のことは忘れて幸せになって下さい。

ディアン

天真爛漫な
アンウェイの子ども。
両親のことが大好き。

スコッチ公爵

ミランダの父親で野心家。
ミランダをただの道具
としか思っていない。

ミランダ

シュイルツの側室。
父親であるスコッチの野心に
より、幼い頃から厳しい教育を
受けてきた。

レオン

困った人を放ってはおけない
心優しい伯爵。
前妻を病気で亡くした後、
アンウェイと出会う。

シュイルツ

グリーンヒル王国の国王。
アンウェイとの結婚から五年後、
側室にミランダを娶る。

アンウェイ

グリーンヒル王国の王妃。
シュイルツとの結婚後、とあること
をきっかけに国の未来と皆の幸せ
を考え城を出ようとするが——!?

第一章 国の未来と皆の幸せを願って

『国王陛下、私のことは忘れて幸せになって下さい』

国王シユイルツ・バード・ミハエルがこの手紙を手を取ったのは、今から約一年半後のことである。

ここグリーンヒル王国は、豊かな自然に恵まれた国である。前国王のひとり息子であるシユイルツは、幼い頃から将来の国王として教育を受け、同い年で幼馴染の公爵令嬢であるアンウエイも、将来の王妃となるべく素養そようを磨いていた。そんなふたりは幼い頃からずっと、お互いを大切に想い合っていた。

五年前、前国王が流行病にかかり急逝し、シユイルツは僅か十六歳で国王となった。それからすぐにシユイルツを支えるべく婚姻が結ばれ、アンウエイは王妃となったのである。国は落ち着いており、ふたりも心から愛し合い、穏やかな日々を送っていた。

……ただひとつの問題を除いて。

「シュイルツ、後継ぎはまだかと、王太子の誕生を国民が心待ちにしているわ。約束の五年が経ったのだから、側室を迎えて子を儲けて？ お願いだから……」

「……どうしてもか？」

ずっと下を向いていたシュイルツは、綺麗な黒髪の頭を上げ、^{すがる} 継るような表情でアンウェイを見つめた。適度に筋肉がつき引き締まっている身体は、すっかり縮こまっている。身長が百八十センチメートルもあるようにはとても見えない。

ふたりは結婚して五年が経つが、子宝には恵まれていない。そしてアンウェイを心から愛するシュイルツは、中々側室を迎えようとはしなかった。しかし、アンウェイは、婚姻五年を経過しても子宝に恵まれない場合、側室を迎えて子を儲けると、シュイルツと約束していたのだ。

アンウェイは、シュイルツへの愛しい気持ちを感じつつ精一杯の笑顔を浮かべ、彼のグリーンの瞳を見る。

「ええ、どうしてもよ」

シュイルツはさらに眉尻を下げ、頭を垂れた。いつもはキリツとしている顔からは、悲愴感が漂っている。

「……俺は、生涯アンウェイを愛すると誓う。しかし一国の王であるため、後継ぎは作らねばならない。産まれてきた子を、ふたりの子として育てよう」

こうして、ようやく側室を娶ることになったのであった。

側近たちは待っていました！ と言わんばかりのスピードで^{てはす} 手筈を整え、僅か一週間後には、前々から内密に決まっていた公爵令嬢のミランダが城へやってきた。

それからシュイルツは、週に一度別棟にあるミランダの部屋を訪れた。^{さすが} 流石に気まずく思うシュイルツは、その日は夫婦の寝室には行かずに書斎で寝るようになったのだ。

シュイルツもアンウェイもこのことには触れず、一見今まで通りの穏やかな日々が過ぎていった。そして半年後、ミランダの妊娠が発覚したのだ。

一週間後の昼下がり。アンウェイが侍女のフランを連れて中庭へ足を踏み入れた時、話し声が聞こえた。

「……ふふっ。そうなのですね。昨日いただいた^{くちもの} 果物も、甘くてとても美味しかったです。いつもお心遣いありがとうございます」

声が聞こえたほうへ視線を向けると、そこにはシュイルツがいた。

その隣にいるミランダの姿を目にしたのは、城に来た時に挨拶をして以来だ。彼女は赤毛の髪を頭頂部で大きなお団子に結び上げており、細い首が、色白で元々小柄な身体をいつそう華奢に見せている。儂だが新しい命を宿すその姿は、満開の真っ赤な薔薇^{ばら}たちが霞むほど輝いてアンウェイの瞳に映った。

ふたりはとてもお似合いで、アンウェイは思わずその場に立ち尽くしてしまう。そして、ふと気が付く。ミランダの濃い茶色の瞳は、明らかにシュイルツに恋をしていると……

(ミランダ様はシュイルツに想いを寄せている)

アンウェイは心の中でそう呟くと同時に、ぱつと顔を背けた。

シュイルツがまるで自分の知らない人のように感じたのだ。彼はミランダのお腹の子の父親なのだ、改めて実感したのである。

アンウェイはふたりに気付かれなかったのを良いことに、そつと踵を返して来た道に戻ったのだ。

翌日。

「フランです。アンウェイ様、お茶をお持ちいたしました。失礼いたします」

部屋でポーツとしていたアンウェイは、フランの声で現実に戻された。

妊娠を希望してからアンウェイは、午前十時と午後三時、夕食後の一日三回、妊娠しやすい体質になると言われる茶葉がブレンドされた茶を飲んで来た。その習慣は今でも続き、この日もフランは午後三時のティータイムに、いつもの茶を準備しアンウェイの部屋を訪室したのである。

「アンウェイ様、お話がございます」

アンウェイがお茶を飲みながらフランを仰ぎ見ると、彼女は何やら興奮した顔をしている。

「……私が勝手に調査した結果によると、ミランダ様は最近つわりで塞ぎ込みがちだそうです。そのため、昨日は国王陛下が気分転換にと薔薇園にお連れになったとのことでした。したがって、国王陛下がミランダ様を好まれているというわけではございません！」

フランの勢いにアンウェイは驚いてしまう。しかし、そんなことはお構いなしにフランは続けた。「また、ミランダ様は気分不良が続き食欲がないそうです。そのため国王陛下が、食の進まないミランダ様へ果物を送られる等、身体を気にかけて差し上げているようです。国王陛下はお優しいので、責任感からの行動であることは一目瞭然！なので、決して心変わりなどではございませんん！」

ふんつと鼻息が今にも吹き出しそうなほどに鼻の穴を大きくしてフランが断言するため、アンウェイは思わず笑ってしまう。

「ふふっ、フランったら。わざわざ聞いてきてくれたのね。ありがとう。心変わりだなんて、そんなことはまったく疑ってはいないわよ」

「な、なら、良いのですが……」

フランは少し恥ずかしがりながら鼻の穴をすぼめ、アンウェイの笑顔にほっとする。しかし、急に真面目な顔付きになったアンウェイにつられ、フランも顔を緊張させた。

「フラン、私はミランダ様と話がしてみたいわ。訪問しても良いか、確認してきてもらえないかしら？」

「えっ!? わっ、わかりました。ただちに確認をして参ります」

フランは動揺から小走りになりそうなのを抑えて、早歩きで確認しにいったのだった。

二時間後、訪問の許可を得たとフランが伝えると、アンウェイはすぐにミランダの部屋を訪れた。

「ミランダ様、この度はご懐妊おめでとうございます。そして本日は、いきなり訪問してしまいごめんなさい。体調はまずまずだと伺いましたが、ご気分はいかがですか?」

「はい、今は落ち着いております。わざわざお越しいただきありがとうございます」

アンウェイとテールを挟んで向かい合わせに座るミランダは、やや緊張した雰囲気をもとって
いる。

「さっぱりとした果物をお持ちしたので、食べることが出来そうな時によろしければお召し上がり下さい。急に訪問を思いついたので、庭の木になっている果物で申し訳ないのですが……」

「まあ、この果物が庭になっているのですか? 私の好きな果物です。あとでございますね。お心遣いありがとうございます」

アンウェイは苦笑い気味に言ったが、すぐにミランダの明るい声が返ってきた。

「ミランダ様のお父様であるスコッチ公爵には、私たちが国王、王妃となった当初からとても助けていただいております。いつも感謝していると、どうかお伝え下さいませ」

「ありがとうございます。父は若くして国王、王妃となられたおふたりの力になりたいといつも申しておりますので、そう言っていただけだと喜びます」

きちんと姿勢を正して座っているミランダだが、少しやつれた顔で血色はあまり良くない。その様子にアンウェイは社交辞令を切り上げ、速やかに本題に入る。

「本日は、ミランダ様に質問をさせていただきます。答えられる範囲で答えて下されば結構です」

「……はい、わかりました」

ミランダはさらに緊張の面持ちを強くし、息をのんだ。アンウェイの斜め後ろに立つフランもまた、心配そうな表情を浮かべながらふたりの様子を見守っている。

「ミランダ様はとても優秀だと伺っております。王妃教育並みに、この国についての歴史や政治などの勉強をしてきたとお聞きしておりますが、本当でしょうか?」

「はい。私は公爵家の娘であり、父は野心家です。ひとり娘の私を良いところに嫁がせようと、大変教育熱心でした」

ミランダは真面目な顔で姿勢を正して答える。そして一瞬間を空け、アンウェイの目をしっかりと見ながら続けた。

「そして、その参考にしたのが王妃教育です。王妃殿下にはとても及びませんが、私も幼い頃から多くの教育を受けて参りました。そのおかげで城の方々に一目置いていただき、国王陛下の側室に選んでいただいたことに大変感謝しております」

言い終えたミランダは、アンウェイに向かって頭を下げる。婚姻二年目頃から、スコッチ公爵は

側室にミランダを推薦し続けていたと聞いている。彼が野心家というのは本当だろう。

アンウエイはひとつ頷き、次の質問へ移る。

「ミランダ様が産んだ子どもが男児であった場合、産んですぐまたはミランダ様が希望をされる場合は乳離れ後に、私と国王陛下の子として育てることになっております。それについてはいかがお考えでしょうか？」

アンウエイの直球の質問に、ミランダをはじめその場にいる全員が固まった。

もちろんアンウエイ自身もデリケートな質問だとはわかっている。しかし、本日はどうしても聞く必要があった。だからこそ回りくどい言い方はせずに質問しようと、アンウエイは始めから決めているのだ。

ミランダは一旦目を閉じ、再び目を開けてアンウエイを見る。

「正直に申し上げます。……出来ることなら性別関係なく、自分の子として自分の手で育てたいです。しかしながら、これは最初からの約束であり決まりごとです。私の産んだ子が、国王陛下と王妃殿下の子となり王太子として国の第一継承者となることを、私はとてもうれしく思っております」

ミランダはアンウエイから視線を外して下を向く。そしてひとつ息を吐いてから続けた。

「また、この大役を与えていただきとても光栄に思っております。自分の手で育てることは出来ないとしても、子の成長を近くで見守っていけるよう、この別棟にはずっと置いて下さると陛下は約

束して下さいました。私はそれだけで十分幸せでございます」

ミランダは迷いのない声ではっきりとそう言い切る。しかし、アンウエイの目を見ることは出来ずにいた。

一方でアンウエイは、ミランダが涙を零すまいと必死に耐えている様子を、ただジッと、無表情で見つめながら聞いていた。

「最後の質問です。……ミランダ様は、陛下を愛していますね？」

ミランダは予期せぬ内容に驚き、咄嗟に顔をあげた。そして真っ白な肌は一気に赤く染まり、涙が頬に一筋の線をつくる。その様子を見たアンウエイは、ミランダの答えを待たずに口を開いた。

「ミランダ様は本当に素敵な方ですね。本日は、急な訪問に応じて下さりありがとうございました。どうかお身体を大事にして下さい。元気な子が産まれるのを祈りしています。それでは、これで失礼いたします」

アンウエイは明るい笑顔で最後の挨拶をして、速やかに退室したのだった。
(どうしてミランダ様は妊娠出来て、私は出来なかったのだろうか?)

そんな、考えても仕方のない思考を抱きながら……

「シュイルツ、本日ミランダ様と話をしました」

アンウエイはシュイルツと一緒に夕食をとりながら話した。

「えっ、何かあったのか？」

シュイルツは少し驚きながら、バツの悪そうな複雑な表情を浮かべる。アンウェイがミランダの話をすると、いつもシュイルツはこの表情になるのだ。

そもそもアンウェイたちは、側室を迎えてからもお互いを思いやりながら過ごしていた。しかし、やはりすべて以前通りというわけには行かず、しばしば気まずい空気が流れるのもまた、事実であった。

「少し話をしてみたいと思っただけです。どのような方なのかと思ひまして。ミランダ様は、本当に素敵すてきな方でした」

実際にミランダと会話をして、アンウェイは心からそう感じていた。

「アンウェイのほうはずっと素敵すてきだな」

そう言っただけを見つめるシュイルツのグリーン色の瞳に、アンウェイは胸をときめかせつつもすぐに皿に視線を落とし、ステーキを切りながら続ける。

「とても良い母親になりそうだと思います。もし男児であれば、ミランダ様から子を奪うことになつてしまい、私はとても罪悪感を抱いてしまうでしょう」

「最初から決まっていた話で、罪悪感を持つ必要はない。私はアンウェイと共に王太子を育てる」シュイルツの先程とは違う強い意志の灯った瞳に捉えられ、アンウェイは決心が揺らぎそうになる。しかし、そんな自分を自分で制した。

そう、アンウェイは大きな決心をしたのである。

翌日。いつものように午後三時にお茶を持って部屋へ来たフランに、アンウェイは侍女長から聞いた話題を振る。

「フラン、結婚おめでとー！」

「ありがとうございます。お話をするのが遅くなり大変申し訳ございません。本日こそはお話をさせていただけようと思っております」

フランは複雑な表情を浮かべながら答えた。

「良いのよ。私もうれしいわ。本当におめでとー」

「あ……ありがとうございます」

心からの笑顔でアンウェイはそう告げるが、フランの表情は硬いままである。

「婚姻に伴い屋敷を出ることが決まったそうね？」

「はい、そうなのです。でも、私は本当は辞めたくなくて……ずっとアンウェイ様にお仕つかえたいのです」

そうフランは訴える。辞めたくなかったからこそ、今までアンウェイに言い出せずにいたのだろう。

「けどあいつが、あっ、幼馴染と結婚するのですが、彼が今度みつつも先の町のアースで働くので、



仕方なくついていくのです。……今まで大変良くしていただいたにもかかわらず、侍女を辞めることになってしまい本当に申し訳ございません」

シュントツという文字が目には浮かぶほどがっかりしている様子のフランに、アンウェイは思わず微笑みを浮かべる。フランの忠誠心を、アンウェイはミリメートルも疑ってはいない。

「フラン、いつ辞めるの？」

「三月末でございます」

「……そう。ミランダ様の出産予定は一月頃だから、ちょうど良いわね」

そう言っつてアンウェイはお茶を一口飲んでから、真面目な表情でフランを見た。

「フラン、そこに座って頂戴。お願いがあるの」

「……し、失礼いたします」

前のめりになってそう言うアンウェイは、優しいが有無を言わせない物言いである。フランは圧倒され、おとなしくアンウェイの前の椅子に座った。

そして、アンウェイはとても真剣な面持ちで話し始める。

「私もフランと一緒にこの城を出るわ」

一瞬、時間が止まったかのようにふたりは見つめ合った。アンウェイがフランの顔の前でパチンツと両手を叩くと、フランはハッと我に返り大声を出した。

「……どっ、どういうことですか!？」

「言葉通りの意味よ。フランには迷惑をかけないようにする。反逆罪になったらいけないし……。私は内密に行動するのは難しいから、フランにあることを調べてきてほしいの。お願い出来ないかしら？」

アンウェイの目は真剣そのもので、フランは言葉失ってしまう。

「城を出たところで、見つければ連れ戻されるわ。だから、私は死んだことにしようと思って。そのあとは名前を変えて身分も隠して、町娘として暮らそうと考えているの。その準備をフランに手伝ってほしいのよ」

とんでもないことをサラッと言うアンウェイに、フランは開いた口が塞がらない。

「死ぬって……なぜですか!? なぜそこまで……? 国民は皆、アンウェイ様を王妃殿下として認めております。国王陛下とも愛し合っておられます。これからも王妃として国王陛下をおそばで支えていくということは、なぜ出来ないのですか!?」

フランはアンウェイを見つめ叫ぶ。しかしアンウェイは、ティーカップを両手で持ち水面に浮かぶばやけた自分の顔を見ながら、ポツリと呟く。

「……私ではなくても良いと思うの」

「何をおっしゃるのですか!?」

フランは目を見開き、鼻の穴を大きく膨らませた。アンウェイは下を向いたまま続ける。

「ミランダ様は王妃となる力量をお持ちよ。そのミランダ様が国王陛下の子を産むのに、わざわざ

私がおその子を取り上げる必要はないわ。私がいなければ、ミランダ様が正妻となり王妃となる。そうすれば、ミランダ様も生まれる子も複雑な思いをする必要はないでしょう？」

アンウェイはソーサーにティーカップをそっと置き、フランのほうを見た。

「そして第二子以降も望むことが出来るわ。もし生まれた子が男の子であれば、きっとシュイルツは、私がいる限り第二子を作ろうとはしない。第一、女の子ならばミランダ様が育てて男の子だったら私が育てるなんて……」

アンウェイは精一杯の強がった笑顔をつくる。両手を膝の上で握りしめ、窓の外を見るとちやうど、木に止まっていた二羽の小鳥が連れ立って飛び立った。

（あなたたちは一緒にいられるのね……）

飛び立った小鳥たちをうらやんで見つめていたアンウェイは、フランの声に呼び戻される。

「しかし、最初からミランダ様はその約束で側室になり、それで納得していらっしゃいます。何よりアンウェイ様が亡くなられたら、陛下がとても悲しまれると思います……」

アンウェイは、シュイルツのことを言われ胸が痛む。

「そうね、シュイルツを深く傷つけてしまうわね……。しかし一国の王として、落ち込んでばかりではいけないわ。彼ならきつと乗り越えてくれる」

凜とした顔で断言するアンウェイに、フランは泣きそうになる。アンウェイはフランの悲しそうな表情に、困ったように笑いながら優しく語り始める。

「フラン、私ね、何年も子どもが出来なかったじゃない？ だから子どもを授かることも、その子が無事にこの世に誕生することも奇跡だと思うの。そんな奇跡の子を、私たちの都合で親と引き離したくはないの。ミランダ様に母親として辛い思いをしてほしくないの」

フランは今にもアンウェイが泣き出すように見え、咄嗟とつさにそばにひざまずき手をぎゅっと強く握った。

「アンウェイ様……」

「ミランダ様がお腹の中で何カ月も育てたうえ、自分の命を賭けて産むのよ？ 本当の親子で生きていけるのに、私がそれを邪魔したくはないの。私がいなくなれば、すべて丸く収まるのよ。皆幸せでばんばんさい万々歳だと思わない？」

明るく言うアンウェイに、フランは胸が締めつけられた。子どもを授かることが出来ずにいるアンウェイにとって、子どもを授かったり子どもがこの世に誕生したりするのは、今のフランが思うよりももっと奇跡的なことなのだろう。

「……で、でも国王陛下とアンウェイ様の幸せはどうなるのですか？」

半分泣いたような顔でフランは尋ねた。

「国を治める国王と王妃よ？ 国民の幸せが私たちの幸せで、第一に考えるべきこと。後継者候補は何人もいればいるほど国民は安心するわ。だからこそ、私よりもミランダ様が王妃となるほうが、この国の未来は明るいよ」

アンウェイは言語化するうちに、抱いていた不安や迷いが次第に薄れていくのを感じる。

「それに、ミランダ様はシュイルツを愛しているから、きっとシュイルツも大切にしてくれるわ。

私がいなければ、産まれてきたふたりの子を実の両親のもとで育てられるのよ。シュイルツとミランダ様でひとつの幸せな家庭を築いてほしい。……それが私の、心からの願いよ」

アンウェイは話し終えた今、清々すがすがしいほどにスッキリとした顔をしている。

心を決めたアンウェイの顔を見て、フランは切ない想いで胸がいっぱいになりながらも、それ以上は何も言えなかった。アンウェイのそばに何年もいたからこそ、想いが痛いほどに伝わってきたのである。

年が明けた一月。雪のちらつく寒空の下、明け方にミランダが元気な男の子を出産した。名前はシュイルツにより「アーノルド」と名付けられた。

「国王陛下、王太子殿下のご誕生おめでとугоざいます」

朝の食卓で、アンウェイはシュイルツに祝辞を述べた。

「……ありがとう。私たちの子どもとなるのだよ。本当に、乳離れをしてからで良いのかい？ 私は産まれてすぐに乳母を雇い、私たちの子どもとして育てるつもりであったのだが」

うつすらと目の下にクマが出来ているシュイルツは、パンをちぎりながらやや不満そうな表情でアンウェイを見ている。昨日ミランダの陣痛が始まってから、シュイルツはミランダの部屋の隣の部屋で仕事をしながら待機していたと聞く。

そんなシュイルツの表情に気付かないフリをして、アンウエイは即答する。

「産んですぐに取り上げるなんてひどすぎます。ミランダ様は子どもを産む道具ではありません。ミランダ様ならば育てながら、その時に向けてきちんと気持ちの整理をして下さるはずです」

「わかった。アンウエイ、君の良いようにしよう」

そう言つてシュイルツは、最近めつきり増えた苦笑いを浮かべた。

(私が子どもを産むことさえ出来たら、シュイルツにこんな表情をさせる必要はなかったのに……) いつの間にかアンウエイは、シュイルツの複雑な気持ちを察しては、自分自身を心の中で責める癖がすっかりと付いてしまっていた。

(ミランダ様とふたりの子どもと一緒に、本当の家族となつて幸せに暮らしますように……) そして同時に、アンウエイは心からそう願うのであった。

王太子誕生から二カ月が経ち、フランの退職が翌日に迫っていた。

この日、アンウエイはシュイルツを夕食後のお茶に誘つた。自室でふたりきりでお茶を飲みながら、シュイルツとの最後の穏やかな時間を噛みしめる。

「シュイルツ、アーノルドはとても可愛いわね」

「ああ、そうだな。もう二カ月になるからな。元気で何よりだ」

シュイルツは下を向いたまま、いつもの複雑な表情を浮かべた。

「ミランダ様はとても素敵すてきな方だわ。シュイルツも大切にしてさしあげてね」

「もちろんだよ。アーノルドを産んでくれたのだ。絶対に無下にはしないよ」

アンウエイは、幼い頃から大切に想っていたシュイルツから目を逸らせない。しかし決心が揺らがないよう、シュイルツを「国王であり、アーノルドの父親」だと、頭に刻みながら見つめ続けた。

「……シュイルツ、私はいつでもこの国の民の幸せを祈っているわ」

アンウエイは自分でも驚くほどに穏やかな声を出した。

「わかつている。俺はこの国の王として、国民の幸せを第一に考えてこれからも行動すると、君に誓うよ」

シュイルツは安心させるように、ようやくアンウエイを見て微笑んだ。

アンウエイはシュイルツの優しさが滲にじむグリーングリーンの瞳を、愛しいその姿を、すべてを目に焼きつけながら、喉まで込み上げ今にも零れ落ちそうな「愛してる」の言葉をなんとか飲み込む。

「シュイルツに伝えておきたいことがあるの。私に何かあれば、ミランダ様を遠慮なく後妻に……新しい王妃に迎えてね」

「何を縁起の悪いことを言うのだ!? ずっとそばで一緒に年を取ろうと誓つたではないか!」

予期せぬアンウエイの発言に、シュイルツは珍しく少し声を荒らげる。シュイルツが本気でそう思ってくれていることが伝わり、アンウエイは喜びを感じてしまう自分を戒めた。

(シユイルツを幸せに出来るのは、もう私ではないのよ)

アンウェイは笑顔を浮かべることが難しくなり、つい俯いてしまう。シユイルツはそんなアンウェイをそっと抱きしめる。

それは、幼い頃からアンウェイの元気がない時にはいつもする抱擁であり、とても優しく温かいものだった。

翌日の三月最終日。昨日までの大雨が嘘のような、雲ひとつない真っ青な空が広がっている。その朝アンウェイは、いつものようにシユイルツを見送った。

「ではアンウェイ、行ってくる」

「はい、いつてらっしゃいませ。お気をつけて」

シユイルツもアンウェイも、いつもと変わらない穏やかな笑顔だ。シユイルツの姿が見えなくなると、執事のリスターにアンウェイは声をかけた。

「リスター、フランを送るため一緒にキラの町へ行くわ。とても世話になったし、フランが結婚までに一時身を寄せるキラの様子を、久しぶりに見にいきたいの。フランの荷物を私の馬車に載せてちょうだい」

「はい、かしこまりました」

軽く頭を下げるリスターを横目に見ながら、アンウェイは努めてさらりと言った。

「馬車から町の様子を少し見るだけだから、護衛は必要ないわ」

「そのようなわけには参りません。……では、ふたりだけお付けいたします」

リスターの返答にアンウェイは、落胆する気持ちを表に出さないように装った。

(やはり護衛なしは無理ね。けどふたりでよかつたわ……。それもこれも、最近この国が平和な証拠ね。良いことだわ)

こうして、アンウェイは本日のミッションを開始したのだった。

馬に乗ったふたりの護衛を前後に挟んだ馬車の中には、アンウェイとフランだけ乗っている。馬車の中でふたりは、計画の最終確認を行う。

「アンウェイ様、本当に決行されるのですか？ 少しでも迷いがあるのならやめましょう！」

「フラン、巻き込んでしまって本当にごめんなさい。けれど、私には迷いがまったくないわ。ただ……今更だけど、本当にこの作戦で良いの!? シユイルツのことだから大丈夫だと思うけれど、万が一計画が知られたらフラン、あなたになんらかの罰が科される可能性があるのよ？」

アンウェイはフランの目を見て、穏やかに諭すように言う。

「私が決めたことですから！ 私のことよりも、アンウェイ様は本当に本当に、よろしいのですか？」

フランはいつものように鼻の穴を大きくし、自分よりもアンウェイを心配する。そんなフランに

アンウェイは苦笑いを浮かべたあと、表情を引き締めた。

「ありがとう。でも私も決めたことなの。私も第二の人生を楽しむから心配しないで！ とても楽しみによ！」

もちろん最後の言葉が強がりであることは、フランにはわかっている。しかし、アンウェイのその表情に覚悟を決めるしかなかった。

その時、ちょうどキラの町に馬車が到着した。

「宿に到着したようです。アンウェイ様、では始めますよ」

フランの言葉にアンウェイは力強く頷く。早速、フランは馬車から降りて護衛に話しかけた。

「アンウェイ様は気分が優れないそうで、私の宿で少し休みたいと言っておられます」

親族のいないフランは、結婚相手が迎えに来るまでの数日間キラの町に宿を取っていた。そこはキラの町の中でも、城から一番遠い場所にある。

「何っ、医者を呼ぼう！」

「いえ、少し休みたいだけとおっしゃって——」

「だがしかし、念のために……」

護衛が心配している声を聞いて、アンウェイは中から声をかける。

「少し目眩めまがするだけだから、医者はいいわ。時々あるのよ。休めば良くなるわ。少し休みたいから、フランに一〜二時間ほど部屋で休ませてもらえるようお願いしたの」

アンウェイの言葉で護衛はしぶしぶ納得した。そしてアンウェイは護衛に付き添われ、フランの部屋のベッドに横になる。

「あとは私がそばにおります」

アンウェイを心配している表情を浮かべながら、フランは丁寧に護衛に告げた。

「わかりました。ドアと建物の前にそれぞれ待機しておりますので、医者の手配含め何かあればすぐにお声がけ下さい」

護衛はそう言うと、一礼をして部屋から出ていく。

「……アンウェイ様、護衛の方がドアの前にいるので、小声で、出来るだけ物音を立てないように静かに準備していきましょう」

フランは小声でそう言うと荷解きを始めた。

アンウェイは頷くと、ベッドからそっと起き上がる。そして部屋の水場でフランに金髪を黒髪に染色してもらうと、準備していた町娘の服に着替えた。

「よしっ、これで少々町の人に見られても大丈夫です！」

「フラン、ありがとう。これがシュイルツへの手紙よ。よろしくね」

「はい、確かにお預かりいたしました」

フランは失くさないようにすぐに懐にしまうと、窓のそばへ行き一点を指さす。

「……アンウェイ様、あの裏口から敷地の外へ出られます。……本当に行きますか？」

「ええ、もちろん行くわ！」

フランが指さしたのは、煉瓦造りの塀の途中にある、人ひとり通れるくらいの小さい木の扉だ。思い留まる気はないのかと何度も確認してくるフランに対し、アンウェイは変わらず「前進あるのみ」の返答を繰り返す。

「わかりました。それでは、行きましょう！」

フランは意を決してそう言うと、椅子を踏み台にして窓から外へ出た。アンウェイもすぐあとに続く。

そして裏口から敷地外へ出ると、以前にフランが言っていた通り右手側に大きな川が流れていた。土手を早歩きで十五分ほど進むと、藁に隠れた高さ一メートル程度の小さな物置にたどり着く。

「持ち主は不明です。キラの町へ来る度に確認しましたが、一度も使われている形跡はありませんでした。狭くて汚い場所です。申し訳ありませんが、こちらに隠れてしばらくお待ち下さいませ。私が迎えに来るまでここを離れないで下さいね」

フランは眉をキリッと吊り上げて、厳しい表情で言う。

「わかつているわ。ありがとう」

アンウェイは迷わずその物置の中に体を屈めて入る。アンウェイが入ると、もうほとんど余裕のない広さであった。

「この荷物をお持ち下さい。中には着ていたドレスと水とパンが入っております。タオルも二枚

入っているのです、まだ濡れている髪を拭いて下さい。もう一枚はブランケットの代わりにお使い下さい」

「ふふっ。準備万端ね。ありがとう」

アンウェイの表情に不安な様子は見られない。それを見て、フランの顔から不安は消えた。

ふたりはもう、やるしかないのだ。

物置の中で三角座りをしているアンウェイに荷物を手渡すと、フランは扉を閉めて物置を藁で再び覆った。そして物置に置いておいた薪の束を抱え、フランは来た道を走って戻った。

そろそろ一時間以上経つため、護衛がアンウェイの様子を見るために部屋に顔を出す可能性がある。

フランは戻っている途中で、裏口の扉を開けてすぐの土手に薪の束を置く。部屋に戻ると誰もおらず静かなままで、どうやら間に合ったようだ。

「よしっ！」

フランは自分に活を入れ、ひとり芝居の開始のゴングを鳴らす。

「アンウェイ様!!!」

フランは、部屋の窓を全開にしてこれ以上出せないほどの大声で叫ぶと、すぐに裏口のほうへ走っていく。そして裏口を出ると、置いておいた薪の束を思いつきり川に投げ入れた。

——ザバーンッ!!

冷静に考えれば小さいがなんとか誤魔化せるだろう、まずは大きな音を上げることに成功した。
「アンウェイ様!!!」

フランは再び叫び、続いてアンウェイが付けていた髪飾りを土手の下を目がけて投げる。髪飾りは川に落ちずにうまく良い位置に留まってくれた。さらに靴も川に投げ入れる。

「アンウェイ様!!!」

もう一度フランが叫んだところで、護衛のひとりが到着した。

「川に落ちたのか!？」

驚きと緊張に顔を強張らせている護衛に、フランは慌てた様子を装って答える。

「はっ、はい!」

フランの返答を聞き、護衛は迷わず鎧を脱ぎ川へ飛び込んで行く。

しかし、昨日の大雨で元々水量の多い川が増水し、濁り、流れも激しくなっていて、護衛はアンウェイを捜すどころか溺れそうになっている。すぐにもうひとりの護衛が到着したが、溺れかけている護衛を助けることで精一杯だった。

(こんなにうまくいくなんて……。神様がアンウェイ様を応援しているとしたか思えないわ)

フランがそう考えていると、護衛が川の中からの搜索は諦めて土手を登ってこようとしていた。

そこでフランは、先程わざと落とした髪飾りを、さも今見つけたかのように大声で知らせる。

「あつ、そこにアンウェイ様が付けていた髪飾りが……!」

アンウェイが落ちたと見せかけた川は、三キロメートルほど海につながる。

護衛は海まで川岸を辿ってアンウェイを捜したが、手掛かりすら見つけれずに二時間ほどで戻ってきた。その間に御者が護衛が乗ってきた馬を使つて城へ知らせに行き、搜索隊がぞくぞくとキラの町に到着していた。

「フラン、わかってているな。これは大事だぞ。城まで一緒に来てもらおう」

護衛にそう言われ、フランは素直に頷いた。狼狽しているフリは決して忘れずに。

シュイルツは知らせを聞き、大急ぎで仕事を切り上げ城に戻ってきた。心配そうにソワソワしている使用人たちには目もくれず、フランたちの待つ部屋へ直行する。

部屋には同行していたふたりの護衛のほかに、護衛隊長やシュイルツ側近のオリオン騎士団長、そして執事リスターがいた。

「フラン、何があったのか君の口から教えてくれ!」

フランは狼狽を一生懸命抑えているフリをする計画だったが、実際に今から国王に嘘をつく緊張で、フリをする必要がまったくないほどに震えている。

「……陛下、申し訳ございません。私がおそばにおりましたのに……」

「何があったのだ!？」

シュイルツの気迫に、フランはさらに身体を硬くした。

「……今朝急に王妃殿下が、私をキラの町まで送って下さるとおっしゃいました。久しぶりにキラの町の様子も見たいからと。ですが久しぶりの外出だったからか、キラの町に到着した頃王妃殿下は体調が優れず、一〜二時間ほど宿の私の部屋で休むことになりました」

フランは一向に治まらない震えに抗いながら、拳を胸の前でギュッと握り話し続ける。

「しかし、休まれてから一時間も経たない頃に急に起き上がり、窓のほうへ行かれました。そして窓から見えた小さな扉を見ながら、『あれは裏口か、出たら何があるのか』とお尋ねになったので、私は『裏口で出たら川がある、昨日の大雨で増水しているだろう』と答えました」

まっすぐにフランを見つめるシュイルツを見ることが出来ず、彼の胸元辺りをジッと見ながらフランは話す。何度も何度も繰り返し復習をしたその内容は、緊張で頭が真っ白な今のフランの状態でも、スラスラと口から出てくる。

「それから窓際に置いた椅子に腰掛け、しばらく風に当たっておられました。すると急に手紙を書かれ、私に『国王陛下に渡すように』とそれを預けられました」

そこでシュイルツの身体がピクツと動いたのがわかったが、フランは止まらずに続ける。

「もちろん私は本日退職をしたため、『私に預けられても困る』とお伝えしました。しかし、王妃殿下はそのことには触れず、『ドアのほうで何か聞こえたから見てきて』とおっしゃったので、私はドアのほうへ行きました」

フランは震えを抑え込みながら話しており、息継ぎがうまく出来ずに息が苦しくなり一旦止まっ

た。しかしすぐに、シュイルツに先を促される。

「それで？」

フランは、一回大きく深呼吸をしてから続きを話す。

「……私がドアのほうへ行きかけると、後ろで音がしました。振り返ると、王妃殿下は椅子を踏み台にして窓から外に飛び出していったのです」

そこでフランは意を決し、顔を上げてシュイルツを見た。

「私は急いであとを追いましたが、王妃殿下は裏口から出てすぐに、迷わず川に飛び込まれました」

衝撃から真っ青になっているシュイルツを見ていられず、フランは思わず下を向く。そして、たった今国王に大嘘をついてしまった事実を実感する。

「私の叫び声を聞き、すぐに護衛の方が来て下さいました。それでも川は水量が多く、水の勢いも激しくて……流されて、王妃殿下の姿はすぐに見えなくなりました……」

「……それで、これが勝手に転がっていた髪飾りか……。本日アンウェイが付けていた物で間違いないか？」

少しの沈黙のあと、重々しく口を開いたシュイルツの問いに、フランはチラッと自分が投げた髪飾りに目をやってから答える。

「……はい、間違いございません……」

シユイルツは悲痛な表情で髪飾りを見ている。

「……そうか。護衛のふたりは、今の話に相違点はないか？」

「……はい、違いはございません！ 私たちが付いておりながら、誠に申し訳ございませんでした」

いたたまれずにずつと下を向いていた護衛のふたりは、シユイルツに話を振られ、ものすごい勢いで頭を下げる。

その様子を見てシユイルツは天を仰いだ。座り込みたい衝動を抑え、フランに話しかける。

「それで、アンウエイから預かったという手紙は？」

「……あつ、はつ、はい、こちらでございます！」

フランはアンウエイから預かった手紙を渡す。手紙の内容はフランも知らない。シユイルツは神妙な面持ちで手紙を取り、ひとつ息を吐いてから、封のされていない封筒から手紙を取り出して開いた。

国王陛下へ

驚かせ騒がせてしまうことを、大変申し訳なく思っております。

突然ですが、私の願いをみつつ聞いて下さいますか？

ひとつ目は、フランや同行していた者に決して罰を与えないで下さい。

ふたつ目は、ミランダ様を正妻に迎えて下さい。アーノルド殿下と、これから産まれる王子王女殿下と共に、幸せな家庭を築いて下さい。

みつつ目は、私のことは忘れて幸せになって下さい。

陛下ならばきっと、願いを叶えて下さると信じております。

陛下とグリーンヒル王国の民の幸せを、心よりお祈り申し上げます。

私がこの世から消える勝手を、どうかお許し下さいませ。

今までありがとうございました。お元気で。

アンウエイ

読み終わるとシユイルツはうなだれ、手紙をクシャツと握り潰した。

「……アンウエイの字で間違いない……。……すぐに私もその場所へ向かう」

シユイルツが、アンウエイが身を投げた川に着いたのは午後三時頃で、町の子どもたちがおやつを食べに家に走って戻る姿が窺えた。そんな中ぞくぞくと集まる城の者に、キラの町の大人たちは何事かとざわついている。

「ここか。何か手掛かりは？」

「はっ！ 昨日の大雨で川が増水し流れも激しいため、搜索は困難な状況であります。今のところ

手掛かりは何も見つかっておりません」

シュイルツの問いに、現場指揮官は申し訳なさそうに答える。ギリツと奥歯を噛みしめ川に視線を落としたシュイルツは、さらに絶望的な気持ちになった。

(この激流に飛び込んだというのか!? ……それほどまで思いつめていたとは……)

「……フラン、アンウェイは何か言っていたか?」

「……私がないほうが皆が幸せになれるとおっしゃっていました。……と言うのも、ミランダ様が妊娠してからは特に悩んでいるご様子で、子を授かることも産まれて来るとも奇跡だ、ともおっしゃっていたほどです。私がずっとそばにおりましたのに、王妃殿下の御心を軽くすることが出来ず、このような事態となってしまう申し訳ございません」

フランは頭が足に当たるほど、思いつきり頭を下げ心から謝罪した。シュイルツは眉間に皺しわを寄せ、目を閉じる。

「そうか。……あの明るくいつでも前向きなアンウェイを、自死を図るまで追いつめてしまうとは、私は夫失格だな……」

苦痛に顔を歪めるシュイルツを見て、フランは何か言わずにはいらなかった。同時にアンウェイの寂しそうな顔が思い浮かぶ。

「陛下、王妃殿下はいつも、国王陛下は国王に相応しい素晴らしいお方だとおっしゃって——」

「陛下!! 海近くの川で靴が見つかりました!」

捜索隊が駆け寄り、フランの言葉を遮る。そして、フランはその靴を一瞥してから言った。

「それは、王妃殿下が本日履かれていた靴でございます」

「……そうか、わかった。……フラン、私はひとつ目のアンウェイの願いを叶えるつもりだ。今まで世話になったな。結婚して幸せになってくれ。下がって良いぞ」

「……長い間お世話になりました。失礼いたします」

フランは最後にそう言い、その場を去ったのだった。

それから宿の自室へ戻ったフランは、シュイルツと捜索隊が帰るのを今か今かと待ち続けた。日が完全に落ち雨が激しく降り始めると、本日の捜索は撤収となったようだった。フランは全員がいなくなったことを確認したのち、アンウェイのいる物置へ走った。

「アンウェイ様!」

藁わらを退け物置の扉をノックしてから、フランは声をかける。

「フラン?」

声を聞きドアを開けると、三角座りをして肩にタオルをかけているアンウェイの姿があった。フランはその姿を見てホッと胸を撫でおろす。藁わらを大量に被せていたおかげで、中までは雨が入っていないようだ。

「うまくいったの? ずっと外が騒がしかったけれど、皆は城へ戻ったの?」

アンウェイはやや疲れた顔でフランに尋ねる。

「はい、うまくいきました！ 激しい雨が降り始めたおかげで撤収しました。さあ、私の宿へ行きましょう。長時間そこに隠れてとてもお疲れになったことでしょう。温かいスープを準備します」

「そう、よかった。フランも罰は受けずに済んだのね。……朝から水分は極力取らないようにしていたのだけど、もう、そろそろお小水が限界だったの……」

そうはにかむように言うアンウェイを見て、フランは胸がきゅんとした。そして、アンウェイのこれからの想い胸がいっぱいになる。

「アンウェイ様、幸せになりましたよ」

「ええ。……フラン、本当にありがとう」

ふたりの間に少しだけしみりした空気が流れる。

しかしその空気を一蹴するようにアンウェイは、楽しそうに明るい笑顔で宣言した。

「私は今から、ゲイト・ハート」よ！ 待っている間に第二の人生の名前を考えていたの。よろしくね！」

アンウェイはニーツと、王妃らしからぬ顔で笑ったのだった。

第二章 第二の人生

自作自演の自殺劇を執行した数日後。アンウェイは、フランが前もって話をつけていた住み込みで働ける食堂に、こっそり移っていた。

「あなたがフランの遠い親戚のお嬢さんね。ご主人に先立たれたそうで、大変だったわね。住み込みで働いていた子が辞めて、うちも困っていたところだったから助かるわ！ これからよろしくね！ ニコニコ食堂へようこそー！」

元気良く挨拶する店主は、元々真ん丸な顔が笑うとさらに丸くなる。そんなとても優しい笑顔の店主は、アンウェイに思いっきりギュッとと歓迎の抱擁をした。

ここまでアンウェイをそばで支え続けたフランは、その様子を見届け、心配しながら夫のベンと共にふたつ隣のアースの町へ旅立っていったのだった。

アンウェイはフランと一緒にアースの町へ行くのも考えたが、行つてから住む場所や仕事を探さなければいけないことや、フランたちに迷惑をかけることが目に見えているため、とりあえず灯台下暗しという言葉信じてキラの町に残った。

しかし、流石さすがにもう少し城から離れたいとは思っているため、フランがアースの町で住み込み

で働ける場所を探してくれることになっている。ニコニコ食堂への迷惑も出来る限り配慮し、アンウェイは頃合いを見計らってアースの町へ移り住むつもりだ。

「ついにひとりになってしまったわね……。よし、第二の人生を謳歌するわよ！」

アンウェイは大きな独り言を言い、空元気からげんきで不安を跳ね除けようとする。

(……国のためにも、シュイルツのためにも、これでよかったのよね)

そして、慣れない硬いベッドで眠りについたのだった。

半年後。アンウェイは、キラの町でケイトとしての生活にすっかり馴染んでいた。

安くて美味しいをモットーとするニコニコ食堂は、店主で料理担当のおばさん、洗い場担当のおばさんの甥のロン、接客担当のアンウェイの三人できりもりしている。

アンウェイにとつて接客を行うのは、もちろん人生で初めてのことである。

だが、フランが食堂で住み込みの仕事を見つけてきてからというもの、下町の食堂の様子や接客の仕方、皿洗い、野菜の洗い方などを彼女からこっそり教えてもらっていたのだ。最初は慣れないことで失敗もしたが、持ち前の器用さですぐに店の戦力となるまで成長した。今では、仕込みなど自分の担当以外の業務まで出来るほどになっている。

「ケイト、出来たよ！ 持って行って！」

時刻は正午過ぎで、食堂はにぎわっていた。おばさんの声かけにアンウェイはすぐに反応し、

ニコリと笑って料理をテーブルへ運ぶ。

「はい！ おじさま、お待たせいたしました。いつもありがとうございます！」

「ケイトは今日も元気だなー！ わしは飯だけじゃなくて、ケイトに元気をもらいに来てもいいのだよ」

「ありがとうございます！ いくらでも元気を吸い取って行って下さいね！」

常連客の対応もアンウェイはもう慣れたもので、そう返すと食堂全体からワアツと笑いが起こる。言葉遣いや態度はだいぶ砕けたが、それでもやはり、アンウェイの接客はまだまだ丁寧だ。しかし、その言動もまたニコニコ食堂の客には新鮮で、ケイトは売上にも貢献しているのであった。

国はというと、この半年の間にアンウェイの葬儀が執り行われた。

体裁を守るためか、アンウェイの尊厳を守ろうとしたのかは不明だが、『キラの町で増水した川に落ち、遺体は発見されていない』と、自殺ではなく事故死として国民へ発表されている。当初は町のあちこちでアンウェイの名前を聞いたが、今は少しずつ国民から忘れ去られている。それで良いと、アンウェイは心から思っていた。

そして、つい先日、ミランダが新王妃の座に就いた。

国民へのお披露目式を見にいったフランが、ミランダは立派な佇まいで、シュイルツは少し痩せたようだがまずまず元氣そうであったと教えてくれた。アンウェイは、自分のものだった王妃の座が、本当にミランダのものになったことに少しの寂しさを感じた。しかし、すぐに自分自身に言い

聞かせる。

「よかった、これで国民も安心ね。私がしたことは間違っではないなかったわ」

さらに二年後、シュイルツとミランダの間に第二子の王女が誕生した。

二十四歳になったアンウェイは、変わらずニコニコ食堂で毎日楽しく働いている。ニコニコ食堂での生活は快適で楽し過ぎて、もう少しもう少し……とキラの町での生活がズルズルと長引いてしまっていた。フランはアースの町で、いくつか住み込みで働けそうな場所をピックアップしているようで、アンウェイの決心がつき次第すぐに交渉に進むと言っている。

もうすぐ秋が訪れようとしているある日、キラの町は朝からソワソワしていた。

国王が町の視察に来るのだ。

そしてこの町の誰よりも、アンウェイが一番ソワソワしているに違いなかった。本日は絶対に食堂から外に出ないと、アンウェイは心に決めていた。

「おばさん、少し体調が優れないので、おつかいはロンに頼んでくれますか？」

「ケイト、大丈夫かい？ 無理をしないで、休みたい時はすぐに言うんだよ？」

「今は大丈夫です。ありがとうございます」

心配そうな表情を浮かべるおばさんに、アンウェイは笑顔で答えた。

(……ただの仮病です。嘘をつけてごめんなさい)

そう心の中で謝罪をしてから、昼に使う野菜を洗い始めた。するといつもは陽気なおばさんが、ふうつとため息をつきながら言う。

「視察団に、真面目に仕事をしていますってアピールしないといけないだろうから、今日の昼は客が少ないかもしれないね」

「いつもとても忙しいので、たまにはそのような日があっても良いのではないのでしょうか？」

アンウェイの穏やかな物言いに、おばさんは思わず笑顔になる。

「そうだね。今日は来てくれたお客さんをゆっくりもてなそうかね」

「そうですね」

そう言っただけは微笑み合う。

おばさんの予想は的中し、正午を過ぎても客が少なく、二〜三割程度しか席が埋まっていなかった。

——チリチリン。

ドアについている鈴の音を聞いて、アンウェイは条件反射で挨拶した。

「いらっしやいませー！」

「すみません、店主はどなたですか？」

アンウェイは一瞬、心臓が止まるかと思った。

ドアを開けて店に入ってきたのは、シュイルツの側近オリオン騎士団長だったからだ。

長身細身の彼は、腰まである長い黒髪を後ろでひとつに束ねている。腰に剣を差しており、威圧感もある。

オリオンの黒い瞳と一瞬目が合うが、アンウェイはすぐに目を逸らし、厨房に向かって大きな声を上げた。

「少々お待ちをー！ おばさーん！」

アンウェイは咄嗟に口調を町娘風にし、声も高めにしてみた。いくら黒髪に染色しているとはいえ、声や顔のパーツで不思議がられる恐れがある。

おばさんと呼ぶとアンウェイはさつさと裏へ下がり、皿洗いをしながら様子を窺う。

おばさんはオリオンと話を終えたのか、くるつと踵を返して急いで戻ってきた。

「ロン、ケイト！ 大変よ！ 今から国王陛下一行がここで食事されるわ！ うちの評判を聞いて来られたらしいわ！」

おばさんは頬を赤らめて興奮している。

対照的にアンウェイは、サーッと血の気が引くのを感じた。まさか町のこんな安い店に国王一行が来るなんて、予想だにしていなかったのだ。

「……おばさん、ごめんなさい、調子が悪くて……。裏で休んでいても良いかしら？」

「ええ、今かい!? ケイトそれは困るよ！ お願いだから、せめて国王陛下一行に料理を出し終えるまではいてもらえないかい!？」

おばさんの発言はもつともである。国王陛下一行が来るとなれば、これからおばさんは料理を作るのにいっぱいいっぱいだろう。アンウェイが休むとなると、接客に不慣れなロンが料理出しなどの対応をすべてひとりで行わなければならなくなる。

(どうしましょう。……ううん、でもきつと大丈夫、アンウェイは死んだと思われるのだから。黒髪にしたし、質素な服に化粧も薄い。目を合わせず料理を出すだけなら、きつと気付かれはしないわ。そう、私は町娘のケイトよ！)

アンウェイは心の中で自分にそう言い聞かせた。

続々と一行が入店している食堂内を見ると、ちょうど席についたシェイルツの姿が目に入った。(シェイルツ……元氣そうでよかった。もうすっかり父親なのでしょうね……)

アンウェイは、ドキッと胸の鼓動が聞こえたような気がしてしまう。ときめく心とともに複雑な感情までもが押し寄せ、打ち消すように両頬を両手で強く叩いた。

「私はケイトよ！」

再び自分で自分を鼓舞し、早速仕事に取りかかる。

「いらつしやいませー！ お水をどうぞー！」

陛下が口にされるものは、先に部下が味見をいたします。その部下の前へ置いて下さい」

オリオンにそう言われ、アンウェイは安堵した。これでシェイルツに直接料理を出す必要はない。「まずは前菜のサラダでございます。今朝、市場から仕入れた新鮮な物ばかりでございます。どう

ぞお召し上がり下さいませ」

おばさんが説明をしている中、アンウェイはサラダを配る。オリオンや周りの人も料理に目がいつており、誰もアンウェイの顔を見ない。そのまま順調に料理出しは進み、最後の料理を出し終えてアンウェイがほっとしていると……

——パリン！

グラスが床に落ちた音が食堂中に響き渡った。音の先である、シュイルツとは別のテーブルで食事をしていた従者のもとに、アンウェイはすぐに駆けつける。

「お怪我はありませんか!？」

「はっはい……」

「お召し物にかかってないですか？」

「いいえ、大丈夫です。グラスを割ってしまい、本当に申し訳ありません」

従者はバツの悪そうな表情を浮かべるが、アンウェイはただグラスが割られただけで済んで良かったと安堵する。

「お怪我もなく、お召し物も汚れなかったようで良かったです」

アンウェイは従者へにっこりと笑って、割れたグラスの破片をまとめる。床を拭くためのモップを取りに行こうとした時、後ろから呼び止められた。

「私の従者がグラスを割ってしまい、申し訳なかった。新しい物を五十個ほど送らせよう」

声の主が誰なのか、アンウェイは顔を見なくてもすぐにわかった。ときめきなのか緊張なのか、判断のつかない胸の鼓動に戸惑いながら振り返る。

「わざとではありませんし、ひとつくらい問題はありません。予備もたくさんありますので、お気になさらないで下さい」

アンウェイはお辞儀をしているように見せかけ、顔を下げたままで答えた。そして、ささっと裏へ下がるうとするが、すぐに質問を投げかけられた。

「そなた、出身はどこだ？」

アンウェイはその場に固まった。

「……アースです」

ケイトはアースの町が出身地だという設定しており、周囲にもそう伝えている。アンウェイはひたすら俯きじっとしていた。はたから見れば、国王に話しかけられ萎縮しているように見えるだろう。

「そうか……そなた、年はいくつだ？」

「……二十八です」

「……」

アンウェイは、俯いたままで居心地が悪く困っていた。するとそんなふたりの様子を見て、おばさんが不安げに口を開く。

「国王陛下、うちのケイトが何か粗相そそうをいたしましたでしょうか？」

「……名をケイトと申すのか。いや、そのようなことはない。ただ知っている者に似ていたものでつい……そんなはずはないのだがな。すまなかった」

そう言うとシュイルツは、一瞬でいつも通りのキリツとした国王の顔となる。

「突然の訪問にもかかわらず、快い対応に感謝する。人気店だけあって大変美味であった。これからもキラの町の人々に、美味しい料理を食べさせてやってくれ」

その後はアンウェイには目もくれずに食事を済ませると、一行は去っていく。

シュイルツを見送るアンウェイは、自身の心臓がうるさいことに気付いていた。

(シュイルツ……痩せてさらに顔が小さくなって、もつと素敵すてきになっていたわ……。変わらず優しくて、元氣そうでよかった。……会うことが出来ないと、恋しさが増すものなのね……)

アンウェイだと知られたらどうしようという想いもあるが、何より今は、久しぶりのシュイルツとの会話に心が踊って仕方がなかったのだ。自分を落ち着かせようと深呼吸を何度も繰り返す。

「あー、緊張したね！ ケイト、無理を言って悪かったね。休んでおくれ」

おばさんは、どしつと豪快に椅子に腰を下ろしながら言った。

「あ……いえ、もう治ったので大丈夫です」

疲労困憊の様子のおばさんに、アンウェイは微笑みながら水を手渡した。

「そうかい？ ……ふはー、ただの水も労働のあとは美味しいねえ。そういえばケイト、二十八だ

なんて、なんで嘘をついたんだい？ 国王陛下に嘘を言うなんて、バレたら罰があるのは知っているだろうに」

「あつ、そうでした。自分の歳を間違えてしまいました！」

アンウェイはおばさんと目を合わせずに、うつかり間違えたかのように装う。

「年上に間違えるなんて、変わった子だねえ！ 私は一歳でも若くなりたくないよ！ はははっ！」

おばさんは緊張から解き放たれ、いつもよりも豪快に笑う。アンウェイも一緒に笑って誤魔化したのだった。

国王一行の視察から一週間が過ぎた午後一時半、昼食時間のピークが終わり、少し店内が落ち着いてきた頃だった。

——チリチリン。

「いらつしやいませ！ ……っ！」

アンウェイはいつもの条件反射で元氣良く言ったが、入ってきた客を見て固まる。

そこにいたのはシュイルツとオリオンで、ふたりは同じ騎士の格好をしており、どうやらお忍びらしい。

「とても美味しかったため、また来させてもらった。今度はふたりでこっそりと」

微笑みながら話すシュイルツに、咄嗟とつさにアンウェイは前回同様、町娘風に語尾を伸ばし声のトー

ンも上げる。

「よ……ようこそおいで下さいましたー！ 空いている席へどうぞー！」

（普段の豪華な食事に慣れていたら、たまには庶民食が食べたくなるものよね。うん、きつとただそれだけよ。テンションも上げていこう。私はケイト、私はケイト……）

急に逃げ出せば怪しまれる可能性があるため、アンウェイは自己暗示をかけ、開き直って仕事に徹する。

「はい、おじさん！ いつももの！」

「ありがとー。あれケイト、なんか今日はいつもよりテンションが高いね。何か良いことでもあったのかい？」

アンウェイの笑顔が引きつった。後ろからシュイルツの視線が突き刺さっているというのに、この常連客はなんてことを言うのだろうか。

「そんなことありません！ いつも通りですよー！」

変な汗をかきながら、アンウェイの不自然すぎるほど元気な接客は続く。そして、何も絡まれることなくシュイルツとオリオンは帰っていき、アンウェイはホッと胸を撫でおろす。

（シュイルツの視線がとても痛かったような、そうでもないような……ううん、ご飯が美味しかったから、また食べに來ただけよね？）

アンウェイはそうであってほしいと思い、もう來店がないことを祈ったのだった。

しかし、アンウェイの願いもむなしく、シュイルツとオリオンは月に一回程度お忍びでやって来るようになる。アンウェイはケイトとして町娘風でなんとかやり過ごすが、最近はいっ来るかど気がでない。來たら來たで困るが、來なかつたら來なかつたで少し寂しいような氣もしてしまう。

（私はときめて良い立場ではないのに……）

アンウェイは、自分の感情に戸惑ってもいた。

暖かくなってきた三月終わり。昼の營業を終了しようとしていた時、オリオンがひとりで店にやってきた。

「こんにちは。近くを通りがかったので寄ったのですが、まだよろしいでしょうか？」

オリオンは申し訳なさそうに、少しいつもより頭を低くして店へ入って来る。

「食材がほとんど残っていないのでメニューは選べませんが、なんでも良いなら大丈夫ですよー！」
アンウェイは、条件反射で町娘風を出せるようになっていた。注文をおばさんに伝え、しばらくすると良い匂いが店に漂い始める。

「ケイトさん」

「はい、なんでしょー？」

アンウェイは、水の入ったコップをオリオンに出しながら答える。

「国王陛下の部下であり友人として、ずっとお礼を言いたいと思っていました。少し私の話を聞